

# ドラマ『冬のソナタ』論

藤 森 猛

## 摘 要

2002年韓国电视剧《冬季恋歌》在中国、日本、台湾等东亚地区一带引发了韩流热潮。本论通过韩流的社会背景、文化背景，分析《冬季恋歌》的作品上、艺术上的魅力。

## はじめに

2002年の韓国テレビドラマ『冬のソナタ』は、韓国国内のみならず、中国、日本、台湾など東アジア各地域で大人気を呼び、「韓流」ブームの火付け役となった。本論では、まず韓流が起きた社会的な背景を概説し、次に韓流が起きた文化的要因を分析する。最後に『冬のソナタ』の作品の魅力をまとめ、『冬のソナタ』が韓流に与えた影響を再考する。

## 1 韓流が起きた社会的背景

### (1) 韓国と韓日、韓中関係

韓国では1948年の南北分断後、1950～1953年の朝鮮戦争を経て、親米政権である李承晩政権（1948～60年）、張勉政権（1960～61年）が続いた<sup>1)</sup>。1961年に軍事クーデターの後、1963年朴正熙が大統領となり、第三共和国（1963～72年）と呼ばれる軍事政権が生まれ、60年代後半から「漢江の奇跡」と呼ばれる経済発展を達成した<sup>2)</sup>。朴大統領は、1971年の大統領選で金大中候補を破ってから、第四共和国（1972～79年）では国会を解散し、政党活動を停止させた<sup>3)</sup>。軍事政権は全斗煥大統領の第五共和国（1979～88年）まで続いた<sup>4)</sup>。全斗煥大統領の時代は韓国における民主化運動が最も激化した時期となった<sup>5)</sup>。

1987年の六・二九宣言による民主化を経て、盧泰愚大統領による第六共和国（1988～93年）が生まれ、1988年のソウルオリンピックを開催し、1992年8月に「中韓国交樹立」を実現し、同年9月に中国を訪問した<sup>6)</sup>。

一方、日韓交流の促進は、金大中大統領（1998～2003年）の下で推進された。1998年4月に「日韓文化交流政策諮問委員会」、8月に「日韓21世紀委員会」を立ち上げ、10月に日本大衆文化の第一次開放、1999年9月に第二次開放、2000年6月に第三次開放を行ない、日本の映画、ビデオ、テレビ放送番組、アニメなどの大衆文化の開放を立て続けに行なった<sup>7)</sup>。2002年5月の日韓ワールドカップ共同開催では、韓国、中国、日本の3国のチームが出場し、金大中政権の下で、韓国、中国、日本の3カ国の文化交流が加速することとなった<sup>8)</sup>。

## (2) 中国と中日、中韓関係

中国は、1950～53年の朝鮮戦争で北朝鮮を支援するために「人民志願軍」として出兵し、米国と対峙した<sup>9)</sup>。また1960年には中ソ論争が激化し、中国は米ソ両陣営と距離を置き、第三世界との接近を強める外交政策を展開した<sup>10)</sup>。国内においては、1966年8月に「プロレタリア文化大革命についての決定」が採決されて文化大革命が始まり、1976年の毛沢東の死去、「四人組」の失脚まで政治的混乱が続いた<sup>11)</sup>。こうした孤立した中国の外交政策を打開したのは、周恩来首相であった。1968年民間による日中覚書貿易を認め、1971年国連代表権を獲得し、1972年にはニクソン大統領の訪中、田中角栄首相の訪中を実現させ、1972年に日中国交正常化、1979年に米中国交正常化へとつながった<sup>12)</sup>。

1978年日中平和友好条約が結ばれ、同年12月鄧小平が政権を掌握すると、改革開放政策が始まった<sup>13)</sup>。鄧小平は市場経済を促進し、欧米諸国、日本との外交関係の促進をはかり、1984年にはイギリスと香港返還合意に達し、1987年台湾の戒厳令の解除をみて、鄧小平路線の継続は1992年中韓国交樹立、1997年香港返還を実現させることになった<sup>14)</sup>。

東アジアで韓流ブームを引き起こした外交的な要因は、盧泰愚大統領、金大中大統領による親米、親中、親日政策と周恩来、鄧小平による親米、親日、親韓政策にあったといえる。従来、東アジアの文化交流は、香港を中継点とする間接的な文化交流であったものが、1990年代後半から韓国、中国・台湾、日本の直接的な文化交流が可能となり、東アジア文化圏が形成され、2000年代初頭に韓流が東アジアで起きる社会的背景となったといえる。

ドラマ『冬のソナタ』論

表1 韓国、日本、中国および米国間の主なできごと（1960～1979年）

	韓国	日本	中国
1961年	・朴正熙の軍事クーデター ・朴正熙の日本訪問	朴正熙の日本訪問 (岸信介首相)	
1963年	朴正熙大統領就任（～1979年）		
1964年		東京五輪の開催	周恩来「四つの現代化」
1965年	日韓基本条約 (朴正熙大統領)	日韓基本条約 (佐藤栄作首相)	
1966年			文化大革命（～1976年）
1968年	日韓で初の姉妹都市 (蔚山市)	日韓で初の姉妹都市 (萩市)	日中覚書貿易の合意（62年 LT 貿易の継続）
1970年	日韓定期旅客船就航 (釜山)	日韓定期旅客船就航 (下関)	
1971年		松山バレエ団の第3回訪中公演	・卓球米国チーム訪中（ピンポン外交） ・国連代表権の獲得
1972年	南北共同声明	・沖繩返還 ・日中国交正常化 (田中角栄首相)	・ニクソン訪中 ・田中角栄首相訪中，日中国交正常化 (周恩来首相)
1973年		・日中で初の姉妹都市（神戸） ・王貞治プロ野球三冠王	日中で初の姉妹都市（天津）
1975年		白仁天プロ野球首位打者	蒋介石死去
1976年		日中海底ケーブル (KDD)	・周恩来，毛沢東，朱徳死去 ・日中海底ケーブル (上海市郵電管理局)
1978年		・日中平和友好条約 (福田起夫首相) ・映画『君よ憤怒の河を渉れ』(追捕)の中国公開	・日中平和友好条約 (鄧小平副首相) ・鄧小平訪日 ・中共11期3中全会
1979年	朴正熙大統領暗殺事件	ジュディ・オング(翁倩玉)が日本レコード大賞	・鄧小平による改革開放 ・米中国交樹立

(注) 2カ国以上に関わる条約などの表記について、例えば、1978年「日中平和友好条約」(日本側の名称)は、中国側では「中日和平友好条約」と表記される。表では日本における名称の表記を基本とした。  
(出所) 鄭在貞著、市村繁和著『主題と争点で読む20世紀日韓関係史』柘植書房新社、2022年、296～306ページ、咸翔姫、許仁順著、蓮池薫訳『冬のソナと蝶ファンタジー』光文社、2006年、224～237ページ、愛知大学現代中国学部編『ハンドブック現代中国 第四版』あるむ、44～247ページ、黄偉修「日台関係年表」：川島真、清水麗、松田康博、楊永明『日台関係史1945-2020』東京大学出版会、2020年、19～20ページ等を参照して作成。

表2 韓国, 日本, 中国および欧米諸国間の主なできごと (1980~2003年)

	韓国	日本	中国
1980年	・光州事件 ・日韓海底ケーブル	日韓海底ケーブル	
1983年		中曽根康弘首相の訪韓	ミッテラン仏大統領訪中
1984年	全斗煥大統領の訪日	・中曽根康弘首相訪中 ・NHK テレビ (ラジオ) ハングル講座開始	・中共12期3中全会 ・サッチャー英首相訪中 (香港返還合意)
1986年		テレサ・テン (鄧麗君) 日本レコード大賞	中国大陸での台湾映画の放映の開始 (『生きている限り、僕は負けない』)
1987年	民主化宣言 (盧泰愚大統領)	チョー・ヨンピル NHK 紅白歌合戦出場	台湾、戒厳令の解除
1988年	・ソウル五輪の開催 ・日韓21世紀委員会の設立 (盧泰愚大統領)	日韓21世紀委員会の設立 (竹下登首相)	
1989年			天安門事件
1990年	・盧泰愚大統領の訪日 ・韓ソ国交樹立		
1991年	韓国, 北朝鮮の国連同時加盟	海部俊樹首相の訪韓	APEC 加盟
1992年	・中韓国交正常化 (盧泰愚) ・盧泰愚大統領の訪中	天皇の訪中	・鄧小平「南方講話」 ・江沢民訪日, 天皇と会見 ・中韓国交樹立 (江沢民)
1993年	映画『ソピョンジェ』ヒット	非自民連立内閣の成立	
1994年	・金泳三大統領の訪日 ・中国映画『霸王別姫』 『秋菊打官司』のヒット	村山富市首相の訪韓	
1995年		・「村山談話」(村山富市首相) ・村山富市首相訪中	テレサ・テン死去
1996年	2002 ワールドカップ 日韓共同開催の決定	2002 ワールドカップ 日韓共同開催の決定	香港特別行政区長官に董建華選出
1997年			・鄧小平死去 ・香港返還
1998年	・金大中大統領の訪日 ・「21世紀に向かう新しい日韓パートナーシップ」共同宣言 ・日韓文化交流政策諮問委員会を組織 (金大中大統領) ・韓国で初の北朝鮮映画の放映 (『安重根と伊藤博文』)	・「21世紀に向かう新しい日韓パートナーシップ」共同宣言 ・天皇が江沢民と会見	・クリントン米大統領訪中 ・江沢民訪日

ドラマ『冬のソナタ』論

	韓国	日本	中国
1998年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本大衆文化の第一次開放（金大中大統領）</li> <li>・日本映画『HANA-BI』、『影武者』の公開</li> <li>・沢知恵ライブ（日本語の音楽公演）</li> </ul>		
1999年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本大衆文化の第二次開放（金大中大統領）</li> <li>・つかこうへい『売春捜査官』（日本語の演劇公演）</li> </ul>	韓国映画『八月のクリスマス』ヒット	マカオ返還
2000年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本大衆文化の第三次開放（金大中大統領）</li> <li>・南北首脳会談（金大中、金正日）</li> <li>・日本映画『Shall we ダンス?』のヒット</li> </ul>	韓国映画『シュリ』ヒット	江沢民主席訪米
2001年		韓国映画『JAS』ヒット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北京、2008年五輪開催地に決定</li> <li>・WTO に加盟</li> </ul>
2002年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワールドカップ日韓共同開催</li> <li>・日韓共同未来プロジェクト（金大中大統領）</li> <li>・『冬のソナタ』の放映（KBS）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワールドカップ日韓共同開催</li> <li>・日韓共同未来プロジェクト（小泉純一郎首相）</li> <li>・小泉純一郎首相の訪朝（「平壤宣言」）</li> </ul>	ワールドカップに中国チーム初参加
2003年	盧武鉉大統領の訪日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『冬のソナタ』の放映</li> <li>・BoA がNHK 紅白歌合戦出場</li> </ul>	『冬のソナタ』の放映

(注) (出所) 表1に同じ。

## 2 韓流が起きた文化的要因

### (1) 韓国

表3は韓国映画の制作本数と外国映画の輸入数である。1960～80年代の朴大統領、全大統領による軍事政権のもとで、政府による映画検閲の強化が行なわれ、劇映画の制作は政治的な批判を受けない「通俗映画」と呼ばれるメロドラマなどのジャンルに限られるようになり、1960年代末～1970年代初頭に年間200本を越えていた韓国映画の制作は1980～90年代には減少し、冬の時代を迎えていた<sup>15)</sup>。1987年の民主化以降、盧泰愚大統領政権のもとでは、アメリカ映画の輸入数が増加し、90年代には外国映画輸入数が韓国映画制作数の約3倍となる状況が続いていた。



写真1 映画『서편제』(ソピョンジェ)の広告(1993年6月ソウル:筆者撮影)



写真2 映画『Shall we ダンス?』(셀위댄스)の広告(2000年6月ソウル:筆者撮影)

1992年中韓国交が樹立した後に、1993年に公開された韓国映画『ソピョンジェ(西便制)』は、アメリカ映画一辺倒であった韓国の映画観客を映画館に引き戻した<sup>16)</sup>。この時期は女性の生き方を描く韓国、中国の国内映画(民族映画)が見直された<sup>17)</sup>。

1998年の日本大衆文化の開放を機に、1998年『八月のクリスマス』、1999年『シュリ』などの韓国国内でヒットした韓国映画が次々と日本や中国でもヒットするようになり、中国

(香港)では韓国 Hanguo からの映画などの大衆文化が「寒流」han liu に乗って中国、日本、台湾、香港に次々と輸出され、ブームを生み出すことを中国語で同音の「韓流」Hanliu と呼ばれるようになった<sup>18)</sup>。

## (2) 中国

1966～76年の文化大革命期に、文芸作品で大衆の人気を最も集めた作品は『白毛女』であった<sup>19)</sup>。1945年の歌劇『白毛女』(主演王昆)、1950年の映画『白毛女』(主演田華)となり、日本の松山バレエ団により1955年バレエ『白毛女』(主演松山樹子)となり、主役の女性喜児の強い生き様は中国国民の圧倒的な支持を得ることができた<sup>20)</sup>。

1976年の文化大革命の終了により、映画関係者は映画制作を再開し、1970年代末に「新时期電影」と呼ばれるニューシネマが登場し、さらに1980年代半ばからは、欧米、日本映画の影響を受けた第五世代とよばれる監督たちが「中国新潮電影」(中国ニューウェーブ)と呼ばれる実験映画を制作し、台湾の「台湾新電影」(台湾ニューシネマ)や「香港浪潮電影」(香港ニューウェーブ)とともに世界の映画界にセンセーションを起した<sup>21)</sup>。

1978年に北京などで「第1回日本映画祭」が開催され、日本映画『追捕』(君よ憤怒の河を渉れ)が空前のヒットとなり、中野良子の演じた真由美の姿は中国国民の圧倒的な支持を得た<sup>22)</sup>。またこの1980年代半ばにはテレビなどの家電製品が普及し、80年代半から日本のテレビドラマ『阿信』(おしん)や山口百恵主演の『血疑』(赤い疑惑)によって、日本の映画・ドラマブームが起こった<sup>23)</sup>。中国ニューウェーブを代表する映画作品においても、張芸謀監督の『紅高粱』(紅いコーリャン)、『秋菊打官司』(秋菊の物語)の鞏俐演ずる女性像が中国、日本、韓国などで支持された<sup>24)</sup>。

文革期において王昆、田華、松山樹子が演じた『白毛女』の喜児、改革開放後に映画『追捕』で中野良子の演じた真由美、山口百恵が演じたドラマ『血疑』の幸子、映画『紅高粱』で鞏俐が演じた我奶奶は、1980年～90年代の映画、ドラマのブームとなり、『冬のソナタ』による韓流ブームの下地となったといえる。

## (3) 日本

日本において、映画館客数のピークは1958年の1億2700万人であり、1960年代半ばにテレビの普及率は90%を超え、娯楽の主流は映画からテレビに移行した<sup>25)</sup>。表4は「よくみる番組」の一覧である。1970～90年代初頭にかけて、「ニュース」・「天気予報」などの視聴が定着しているのに対し、田村穰生氏は「ドラマ系のジャンルはおしなべて下降気味である」と指摘している<sup>26)</sup>。1990年の数値をみると、テレビ放映の「映画(外国映画)」は44.2%であるのに対し、テレビドラマの「恋愛青春ドラマ」は14.8%にすぎない。

田村穰生氏によると、人気テレビドラマでは、60年代は『おはなはん』、『肝っ玉かあさん』などのホームドラマ、70年代が『時間ですよ』などの人情ホームドラマ、『飛び出せ！青春』、『おれは男だ！』などの学園ドラマ、80年代は『金曜日の妻たちへII』、『積木くずし』、『ふぞろいの林檎たち』、『3年B組金八先生』などの恋愛青春ドラマ、90年代初期は『東京ラブストーリー』などのトレンドードラマであった<sup>27)</sup>。1990年代の初頭にテレビ視聴者は新たな恋愛ドラマ、青春ドラマ、学園ドラマの出現を待ち望んでいたともいえる。

表3 韓国映画の制作本数と外国映画の輸入数（抜粋）

	韓国映画の制作数	外国映画の輸入総数	外国映画輸入数に占める 米国映画数
1971年	202	82	52
1976年	134	43	28
1981年	87	31	10
1986年	73	51	39
1991年	121	256	132
1994年	65	198	82

（出所）韓国映画振興公社『韓国映画年鑑』1984年度版～1995年度版、映画振興公社、1984年～1995年より作成。

表4 よくみるテレビ番組（東京30km圏、13～59歳、各年10月）抜粋（%）

	1975年	1980年	1985年	1990年
ホームドラマ	45.3	36.8	35.0	34.7
恋愛青春ドラマ	17.2	14.2	16.1	14.8
時代劇	36.5	29.5	26.3	22.9
映画（日本映画）	11.6	18.2	24.8	20.9
映画（外国映画）	51.2	44.9	47.3	44.2
定時ニュース	56.9	53.3	53.9	48.1
天気予報	48.8	49.2	54.3	54.6
ニュースショー	30.1	24.2	28.0	37.5
スポーツニュース	—	34.4	44.6	39.3
プロ野球	38.5	41.6	40.5	37.8
料理番組	—	22.6	27.1	21.0
朝昼のワイドショー	21.5	18.9	20.3	22.0
クイズ・ゲーム	39.9	44.5	39.9	39.6
スペシャル番組	—	42.5	50.2	41.6

（出所）田村穰生「放送メディア」：香内三郎、山本武利他『メディアの現在形』新陽社、1993年、126ページ（JNN データバンク調査による）。



また、アニメーションにおいては、1974年に高畑勲、宮崎駿によるテレビアニメ『アルプスの少女ハイジ』が大ヒットし、80年代にはスタジオジブリのアニメ映画『風の谷のナウシカ』、『魔女の宅急便』などが次々とヒットし、2001年『千と千尋の神隠し』の大ヒットにつながった<sup>28)</sup>。1990年代は少女ヒロインの青春アニメが宮崎駿によって定着していたのである。

一方1990年代～2000年代初頭は日本において、香港映画ブーム（港流）が訪れた。王家衛監督による1990年『阿飛正伝』、2000年『花嫁年華』などにおける女優張曼玉（マギー・チャン）の生き方に中国、日本、韓国の映画観衆の共感が集まった<sup>29)</sup>。しかし2003年の俳優張国榮（レスリー・チャン）の死去に伴い、香港ブームが去り、韓流ブームが訪れることになるのである。

### 3 ドラマ『冬のソナタ』の魅力

#### (1) 『冬のソナタ』と韓流

表5は『冬のソナタ』（겨울연가, 冬季恋歌）関連史である。2002年日韓ワールドカップが開催された年の1～2月に、韓国KBS（韓国放送公社）でテレビドラマ『冬のソナタ』は放送され、高い人気を呼ぶヒット番組となった<sup>30)</sup>。2003年4月に日本のNHK衛星第二（BS2）で放送されると、反響が大きくなり、同年12月にアンコール放送がされ、2004年4月にはNHK総合テレビで再放送がされた<sup>31)</sup>。

『冬のソナタ』のユン・ソクホ監督は、1992年に監督デビューし、1994年のテレビドラマ『愛の挨拶』を監督したときに、ペ・ヨンジュンを主演に抜擢した<sup>32)</sup>。2000年に「四季四部作」の第一作『秋の童話』を制作した後、第二作として『冬のソナタ』を制作した<sup>33)</sup>。ユンソクホ監督は、両作品に主人公の「出生の秘密」と初恋物語を組み合わせるストーリーを生み出し、「出生の秘密」をストーリーのキーワードにする手法は、日本や中国で1970～1980年代にかけてヒットした『赤い疑惑』、『赤い運命』などの山口百恵のテレビドラマを参考にしていると考えられる<sup>34)</sup>。

2003年のNHK衛星放送での『冬のソナタ』の放送は、日本における本格的な韓流の起源であるとされている<sup>35)</sup>。『冬のソナタ』の爆発的ヒットは、①主演のペ・ヨンジュン、チェ・ジウの人気を高め、②助演のパク・ヨンファ、パク・ソルミの人気を高め、③歌手RYUの人気を高めた<sup>35)</sup>。またこの作品人気は④他の韓国映画・テレビドラマの人気、⑤他のKポップの人気、⑥他の俳優、アーティストの人気へとつながった<sup>36)</sup>。さらに⑦韓国へのロケ地巡りツアーなどの旅行産業、ホテル産業に影響を与え、⑧ペ・ヨンジュン、チェ・ジウの出演する化粧品、電機製品など様々な産業におよび、日本や中国、台湾の人々が、韓流に熱狂す

る時代が始まった<sup>37)</sup>。

## (2) 『冬のソナタ』の魅力

『冬のソナタ』には様々な魅力が込められているが、以下の3つに凝縮される。

第1は韓国女性視聴者向けの「純愛物語」であり、主人公たちの「出生の秘密」をめぐる物語が最後まで続き、恋愛ドラマとサスペンスドラマを合体させたことにある<sup>38)</sup>。

第2は音楽性である。主題歌を歌う RYU の歌声は、ドラマの展開の中で、常に同時に流れ、視聴者が音楽を聴いただけで、そのシーンを思い起こせるように、制作されている<sup>39)</sup>。これは、中国や日本で1970～80年代にヒットした恋愛ドラマ、恋愛映画の手法を使っている<sup>40)</sup>。

第3は、高野悦子氏が述べているように、主人公ユジンの設定にある<sup>41)</sup>。日本や中国、台湾の視聴者の大部分は、中高年の女性層であり、視聴者が女性主人公になって、高校時代に転校生チュンサン（ペ・ヨンジュン）と初恋に落ち、設計を担当する会社員時代にフランス帰りの上司ミニョン（ペ・ヨンジュン）と再び恋に落ちるのである<sup>42)</sup>。

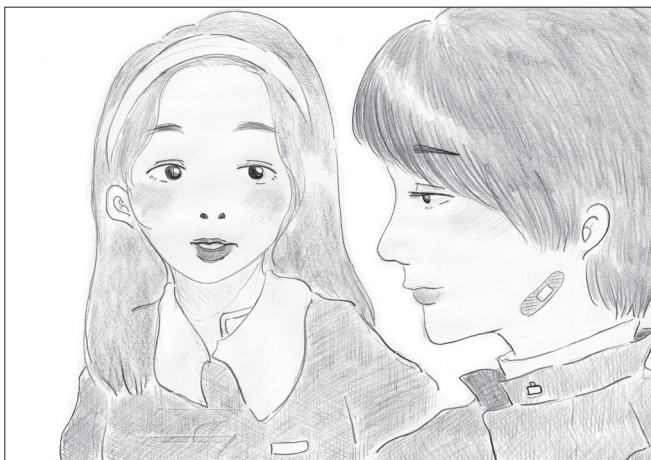
表5 『冬のソナタ』関連史（1992年～2005年）

	『冬のソナタ』関連	その他のできごと
1992年		ユン・ソクホ『人生のリポートマーク』（テレビドラマ）で監督デビュー
1994年		・ペ・ヨンジュン『愛の挨拶』でデビュー（監督はユン・ソクホ） ・チェ・ジウ女優デビュー ・パク・ヨンハ『テーマ劇場』でデビュー
1996年		『初恋』（KBS）でペ・ヨンジュンとチェ・ジウ共演
1998年		パク・ソルミ『大人はわからない』でデビュー
2000年		ユン・ソクホ監督『秋の童話』制作
2002年	・1月～3月『冬のソナタ』放送（韓国KBS）	
2003年	・4月～9月『冬のソナタ』放送（NHK衛星第二） ・12月『冬のソナタ』集中再放送（NHK衛星第二）	
2004年	・4月『冬のソナタ』再放送（NHK総合テレビ） ・9月『「冬のソナタ」グランドフィナーレ～感動をありがとう・ソナチアのつどい』放送（NHK）	・3月チェ・ジウの訪日 ・4月ペ・ヨンジュンの訪日 ・5月RyuがNHK大阪ホールでコンサート ・6月「ポラリスネックレス」訴訟事件 ・7月パク・ヨンハの訪日 ・7月チェ・ジウが小泉首相を訪問

ドラマ『冬のソナタ』論

	『冬のソナタ』関連	その他のできごと
2004年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・12月『冬のソナタ』字幕版の集中放送 (NHK 衛星第二)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9月チェ・ジウ訪日, 「冬のソナタクラシックコンサート」に出演</li> <li>・10月パク・ヨンハが写真集発売イベント</li> <li>・10月東京国際映画祭にチェ・ジウが出演</li> <li>・11月ペ・ヨンジュンが韓国・青龍映画祭の手形モニュメントに参加</li> <li>・ペ・ヨンジュン写真集発売で訪日</li> <li>・12月チェ・ジウの訪日</li> <li>・12月パク・ソルミ訪日, 「冬のソナタの夕べ」に出演 (大阪)</li> <li>・12月ペ・ヨンジュン新潟中越地震に3000万円寄付</li> </ul>
2005年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月『冬のソナタ』再放送 (韓国 KBS)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月「冬ソナ専用機」就航 (大韓航空)</li> <li>・1月「冬ソナ」切手発売</li> <li>・3月パク・ヨンハ訪日, 臨時列車「ヨンハ列車」でイベント</li> <li>・3月ペ・ヨンジュン主演映画『スキャンダル』放送 (テレビ東京)</li> <li>・3月パク・ソルミ東京ドームで「第1回韓流まつり」大使になる</li> <li>・4月 RYU が NHK 教育『ハンゲル講座』のレギュラーになる</li> <li>・5月ペ・ヨンジュン切手が日韓同時発売</li> <li>・ペ・ヨンジュン来日1周年記念イベント (横浜)</li> <li>・6月ペ・ヨンジュン過労のためソウルの病院に入院</li> <li>・6月チェ・ジウ ドラマコンサート (韓国ソウル)</li> <li>・7月チェ・ジウ過労のため倒れ, 韓国広報大使としての訪日キャンセル</li> <li>・7月パク・ヨンハラライブ出演 (横浜)</li> <li>・8月チェ・ジウ『Tokyo〜美人物語』(日本テレビ) 出演</li> <li>・8月ペ・ヨンジュン『24時間テレビ』(日本テレビ) に出演</li> <li>・8月パク・ソルミ, 日本での女優活動宣言</li> <li>・8月パク・ヨンハ日本の武道館公演</li> <li>・8月ペ・ヨンジュン映画『四月の雪』PR で訪日</li> <li>・8月パク・ヨンハ大阪のシン・スンフンコンサートに出演</li> <li>・9月ペ・ヨンジュン『徹子の部屋』に出演</li> <li>・9月チェ・ジウ「チェ・ジウ ドラマコンサート」(大阪) に出演</li> <li>・11月チェ・ジウ『輪舞曲』(TBS) に出演</li> </ul>

(出所) 咸翔姫, 許仁順著, 蓮池薫訳『冬ソナと蝶ファンタジー』光文社, 2006年, 224~237ページ等参照。



イメージ画1 ユジン (チェ・ジウ) とチュンサン (ペ・ヨンジュン)



イメージ画2 チュンサンとユジン



イメージ画3 ポラリスのネックレスをつけたユジン

(出所) イメージ画1～3 藤森幸作画

「近くて遠い」とされていた韓国を、日本、中国、台湾の人々が「近くて近い」国であると実感し、20年以上にわたって「韓流」ブームが続いている源流となったのが、テレビドラマ『冬のソナタ』であるといえよう。

## おわりに

本論では『冬のソナタ』によって「韓流」が引き起こされた韓国、中国、日本の政治や外交関係を含む社会的要因をまとめ、つぎに韓国、中国、日本の映画、テレビドラマなどの文化的要因をまとめ、最後に、『冬のソナタ』の作品自身の魅力をあげた。2002年の『冬のソナタ』放送以来、現在にまで20数年にわたって、「韓流ブーム」が続いている。東アジアで大ヒットする映画、ドラマ、アニメ作品は、女性が主人公の作品であり、ジェンダー平等をめざす、中国、韓国、日本、台湾の共通の文化意識となっている。

## 注

- 1) 「韓国戦争」(朝鮮戦争)は、「六・二五事変(6・25動乱)」で始まったとされる(慎斗範『韓国政治の現在』有斐閣、1993年、4ページ等参照)。
- 2) 1961年の「5・16軍事クーデター」は朴正熙少将によって起された。朴正熙は1961年12月に大統領直選制の改憲案を採択し、1963年の大統領選で、尹潽善第4代大統領を破り、第3共和国をスタートさせた(同上『韓国政治の現在』19ページおよび74ページ等参照)。
- 3), 4), 5) 民主化運動の中心となった世代は「386世代」と呼ばれた(同上『韓国政治の現在』16～20ページおよび和田春樹『北の友へ南の友へ』御茶の水書房、1987年、123ページ、佐々充昭「386世代と韓国映画」：徐勝、黄盛彬、庵道由香『「韓流」のうち外』御茶の水書房、2007年、197～198ページ参照)。
- 6) 『現代用語の基礎知識』自由国民社、1996年、572ページおよび愛知大学現代中国学部編『ハンドブック現代中国 第四版』あるむ、2012年、245～251ページ等参照。
- 7) 鄭在貞著、市村繁和著『主題と争点で読む20世紀日韓関係史』柘植書房新社、2022年、206～208ページおよび藤森猛「演劇『旅人打鈴』」：愛知大学現代中国学会『中国21 Vol. 11』風媒社、2001年、233～234ページ等参照。
- 8) 咸翔姫、許仁順著、蓮池薫訳『冬ソナと蝶ファンタジー』光文社、2006年、224～237ページ等参照。
- 9) 愛知大学現代中国学部『ハンドブック現代中国』2003年、84～85ページ等参照。
- 10) 同上『ハンドブック現代中国』98～99ページ等参照。
- 11) 文化大革命(1966年～1976年)は1977年8月の中共11全会において正式な終結をみた(同上『ハンドブック現代中国』265ページ等参照)。

- 12) 同上『ハンドブック現代中国』94～95ページ等参照。
- 13) 同上『ハンドブック現代中国』88～89ページ等参照。
- 14) 同上『ハンドブック現代中国』264～266ページ等参照。
- 15) 四方田犬彦『電影風雲』白水社, 1993年, 111ページ等。
- 16) 『ソピョンジェ』邦題『風の丘を越えて』(林權澤監督, 主演金明坤, 吳貞孩): 『TVジャーナル』1993年8月7日号, 21ページ, シネカノン『風の丘を越えて』シネカノン, 1994年, イム・グォンテク「遠くて近い日本における私の映画」。
- 17) 韓国における映画入場者総数は1993年に48,230,788人であったが、『ソピョンジェ』の入場者数は, 1993年4月10日～12月3日のロードショー入場者数で1,035,741人に達した(韓国映画振興公社『1994年度 韓国映画年鑑』映画振興公社, 1994年, 109ページ等)。
- 18) 門間貴志「変貌する韓国映画」: 佐藤忠男編『新世紀アジア映画』キネマ旬報社, 2000年, 70ページ等参照。
- 19), 20) 藤森猛「映画『白毛女』論」: 愛知大学名古屋語学教育研究室『言語と文化』第50号, 2024年, 24～27ページ。
- 21) 藤森猛「中国映画の歩み」: 愛知大学現代中国学会『中国21』Vol. 11, 風媒社, 2001年, 3～5ページ参照。
- 22) 同上「中国映画の歩み」4ページ参照。
- 23) 同上「中国映画の歩み」5ページ参照。
- 24) 同上「中国映画の歩み」6ページ参照。
- 25) 山本武利「戦後メディア史」: 香内三郎, 山本武利他『メディアの現在形』新陽社, 1993年, 42ページ。
- 26) 田村穰生「放送メディア」: 香内三郎, 山本武利他『メディアの現在形』新陽社, 1993年, 127ページ。
- 27) 同上「放送メディア」127ページ参照。
- 28) 藤森猛「テレビアニメ『アルプスの少女ハイジ』論」: 愛知大学名古屋語学教育研究室『言語と文化』第48号, 2023年, 57ページ。
- 29) 播国霊, 李照興主編『王家衛的映画世界』百花文芸出版社, 2005年, 342～346ページ等参照。
- 30) 高野悦子, 山登義明『冬のソナタから考える』岩波書店, 2004年, 2ページ等参照。
- 31) 同上『冬のソナタから考える』2～6ページ。
- 32) 額田厚『韓国スター完全データ名鑑2012年版』廣濟堂出版, 2011年, 172ページ等。
- 33) 四季四部作は『秋の童話』(2000年), 『冬のソノタ』(2002年), 『夏の香り』(2003年), 『春のワルツ』(2006年)(前掲『冬のソナタから考える』28ページ等)。
- 34) 劉文兵氏は「1980年代に山口百恵は, 春のそよ風のごとく中国に吹き込んできた。」と指摘(劉文兵『中国10億人の日本映画熱愛』集英社, 2006年, 138ページ)。
- 35) 小倉紀藏『韓流インパクト ルックコリアと日本の主体化』講談社, 2005年, 68～69ページ等参照。
- 36) 前掲『冬ソナと蝶ファンタジー』144ページ参照。
- 37) クォン・ヨンソク『「韓流」と「日流」文化から読み解く日韓新時代』日本放送出版協会, 2010年, 43ページ参照。

- 38) 高柳美智子, 岩本正光編著『「冬のソナタ」から見えてくるもの 韓流の韓国を訪ねて』かもがわ出版, 2006年, 156~164ページ等。一方で, 四方田犬彦氏は『冬のソナタ』について「ここにはほとんどといっていいほど, 韓国的な痕跡が存在しない」(『「ヨン様」とは何か——『冬のソナタ』覚書き』:『新潮』2005年7月号)という論評を挙げている(林香里『「冬ソナ」にハマった私たち 純愛, 涙, マスコミ……そして韓国』文藝春秋, 2005年, 128ページ)。
- 39) 前掲『「韓国」と「日流」 文化から読み解く日韓新時代』186ページ等参照。
- 40) ユン・ソクホ監督は日本のテレビドラマ『ふぞろいの林檎たち』の音楽手法を使っていると考えられる。
- 41) 高野悦子氏は「このドラマは, ユジンと一心同体になりながら見ている女性たちを, 本当に気持ちよくさせてくれました。」と指摘(前掲『冬のソナタから考える』47~48ページ)。
- 42) 追立祐嗣『『冬のソナタ』に見られる「社会」と「個」の相克』共栄書房, 2014年, 22ページ参照。